

phase 7 fuji odyssey ②

となった富士スビードウェイが検討された。さらに富士急ハイランド（当時は日通が株主）も会場としてノミネイトされた。

会場を物色している時点で、「既に参加予定のアーティストとは仮契約ぐらいは結んでいただろう（木村氏）」。このあたりでは、並行して動いていた各々の役割を分けて述べねばならないが、ここはまず、大きな流れから始めよう。

当然、日本国内でのPRについても、ギヤンドルフは日本の大手代理店に打診している。代理店側としても、改めてギヤンドルフに対してプレゼンテーションを行うのだが、何度も言うように、当時日本ではロックというものが全く認知されていない。前号でも少し述べたように、音楽評論家とも接触・折衝を試みるが、その温度差は激しいものだったという。当時の音楽評論家とは、いわばレコード会社のお抱えのような存在であり、レコード会社が扱う商品は「邦楽が9割、ロックどころか洋楽が全体の1割ぐらいいやったんちやうやるか（木村氏）」という状態。その洋楽部が扱うものの中には、ジャズがあり、ブルースがあり、そのマイノリティとしてロックがあったにすぎない。まずその温度差に加えて、あくまでイベントのマーケットを国内に見出そうとする代理店と、「L.A.から、N.Y.から、サンフランシスコから、ロンドンから、アムステルダムから若者が大挙してやって来る。世界から100万人が集まる」という説きを持った主催者とは、端から話の合おうはずもない。結果、代理店のプレゼンテーションは却下され、「それよりも」と、これも前号で触れたように、「規模こそ小さいが、ロックフェスティバルと同じ考えでイベントを行っている人物に任せよう、木村という男にやらせてみよう」となった。まず一つのファクター。これが木村氏が富士オデッセイに深く関わるキッカケとなった訳である。

「富士オデッセイ」の日本側のプロデューサーとなった男、木村英輝。もちろん、彼がその役を担った時点でマイケル・グリーンらは日本を助けている。訪れているというよりも、滞在しているわけである。先述の会場探しにしても、短期の滞在で完了するものではない。「僕が付き合うてただけでも1年ぐらいいはいてたからね（木村氏）」。そのぐらいの大きかりな日程で企画されていたわけだ。これも前号で触れたが、ジェネラルプロデューサーとして木村氏に実際オファーされた提示金額が、1カ月に100万円。今の価値で言えば

2000万近い額である。滞在費などを考えると、かなり大規模な出資をその時点で集めていたことは想像に難くない。

「任されたと言つても、こっちはビジネスのことなんか何もわからへんわけやからね（笑）」と前置きしながらも、木村氏は開催に向けての準備に奔走することになる。「出資が集まっていると言つても、それは必要経費として使わなければならないお金やからね。僕が受け取ったギヤランティも必要経費や何やら、全て込みの金額やつたから（木村氏）」。

時代はまだ1ドル360円という固定レートの時代。「二クソンのオイルショック以前の話やからね。大きな話で言えば、大蔵省の認可や、物を輸入するわけではなくて、人間を日本に送り込んで商売をするという話やからね、通産省もうるさいわけ。小さな話で言えば会場のトイレの設置とかね（木村氏）」。大小取り混ぜて、非常に手間がかかる、煩雑な仕事が多かったという。

残念ながら、ここから先の経緯は、「実現できなかった」という結果を目指して紹介しなければならぬ。そこで、数々の下準備が並行して行われていることを確認した上で、この「富士オデッセイ」を、主催者側がどのように位置づけていたかを、これもくどいほどの繰り返しになるが、再度確認しておこう。開催を目指す年は大阪万博の年、1970年。「大阪万博が大人の集いとするならば、富士オデッセイは富士の裾野に若者が集まるイベントやと、そういう位置づけやつたわけやね（木村氏）」。その企画意図を踏まえた上で、何段階かに分けた出資を募り、さらに主催者が日本に滞在し、代理店の撤退や、様々な経緯を経て準備が進められたわけだ。

そして、その準備に支障をきたす、いくつかの出来事があった。「富士オデッセイ」は一転、その身を荒波に向かわされることになっていく。

To be continued

- '03 10.5 パレスチナ自治政府のアラファト議長、パレスチナ緊急内閣を発足
- '03 9.26 外道 21年ぶりにアルバム発売。翌日、京都大学西部講堂にてライブを開催



since 25.Apr.2003
Entertainment Hall MOJO WEST
(京都市北区上賀茂桜井町 エデン北山B1F)